

E 17 福岡市における高齢者の生活実態に関する調査 (第1報)

生きがい・幸福感に貢献する諸因子について——

筑紫女学園短大 小川直樹

目的 昭和59年度科学研究費補助による課題「現代家族の機能障害の実態と紛争処理の総合的研究——法・政策のための基礎的調査・分析——」の一環として、福岡市において初年度調査が行われた(研究は3ヶ年継続研究)。本報告は、調査の分析を通して高齢者におよぼす生きがいや幸福感が自らのどのような生活のあり方とかがわっているかの認識に基づいて、知見を明らかにしようとするものである。第1報は在宅高齢者に限定する。

方法 調査対象地域は福岡市東区・中央区・南区。各校区・町内から65才以上の男女全員をリスト・アップすることを目標に名簿を作成し、各区とも20名の高齢者を抽出して対象者とした。名簿作成に当たっては、入院加療、転居等も多く不十分な点は、各町内の高齢者の世話役の助言で補った。調査時期は昭和59年10月から12月にかけて留置法で行った。配票、630、有効票が418であるから有効回収率は66.3%である。

結果 (1) 生きがいと幸福感を共に高めることに貢献する因子として、(もちろん、諸要因がよりよく充足されている場合) 近所とのつき合い程度、暮らして楽観的見通しが確保されていること、これぞでの人生への満足度、知・友人とのつき合い程度があげられる。

(2) その他にズレを生じさせる因子、小さな貢献しかない因子の検証がなされた。

(3) 一般的に考察されるように両者は、おおむね重なり合うものであることが明らかになった。しかし、詳細に観察してみると幸福感が子どもとの家族的な絆により多く関連すること、生きがいが個人的な側面に多くつながることの検証がなされた。